



日本の昔話

イラスト ヒロミチイト

むかし、あるところに一人のわかものがおりました。

わかものは、まずしいひやくしゅうで、

そまつないえにたった一人でくらししていました。

ある あきの日、わかものは田んぼでのらしごとを

していました。

するとふいに、ばたばたっ、というおとがきこえました。

わかもの「ん？ あれはなんのおとだ？」

そこには、一わのうつくしいつるがおりました。

つるは、りょうしがしかけたわなにかかって、

くるしんでいたのです。

つる「いっしょ、いっしょ……」

わかもの「おお、かわいそうに。いたかったろう」



(ガチャン)

わかものがわなをはずしてやると、

つるはまっ白<sup>しろ</sup>なはねをのばして、

そらにまい上がりました。

(バタバタバタ)

わかもの「りょうしには、きをつけるんだぞ」

つる「ふうー」

つるはうれしそうに「こえなくと、山のかなたへ

とんでいきました。



それからなん日かたった、ゆきがちらつくばんのこと。  
わかものは一人さびしくいろりの火ひにあたって  
いました。すると、いえのとをたたくおとがします。

(トントン)

そこには、いろの白しろいうつくしいむすめが  
たっていました。

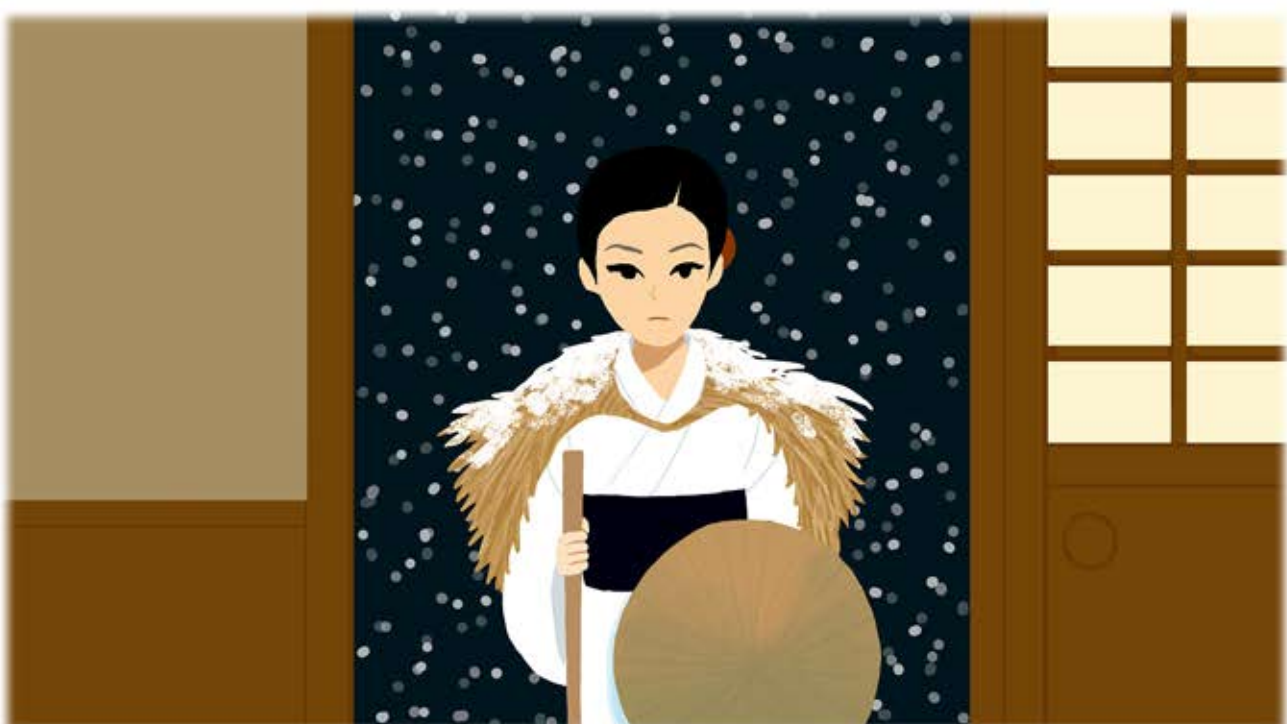
**むすめ** 「このゆきの中なか、みちにまよってこまっております。  
どうか一ばんとめてくださいますか」

**わかもの** 「こんなそまつないえでよければ、

あがっておくれ」

わかものはころよくむすめをとめてやりました。

ところが、むすめはいっこうにかえろうとはしません。





そして、はずかしそうにいいました。

**むすめ**「あなたさまのよめにしてください」

**わかもの**「とんでもない。おれは、このとおりの  
びんぼうぐらし。とてもよめさまなどもらえた  
みぶんではない」

**むすめ**「びんぼうでもかまいません。どうか、

あなたさまのおそばにおいでください」

わかものは、そんなむすめをいとおしくおもい、

よめさまにすることにしました。

よめさまは、まい日、よくはたきました。

一人ぐらしでさびしかったうちは、みちがえるように  
あかるくなりました。

**わかもの**「おれは、しあわせものだ…」



そんなある日、よめさまは、わかものにいいました。

**よめさま**「わたしにはたをおらせてください。」

でも、どうか、わたしがはたをおっているあいだは、

けっして中なかをのぞかないでください。」

わかものがけっしてのぞかないとやくそくすると、

よめさまはなんとはいに入はいって、しろうじをしめて

しまいました。

とんとん からり

とんからりん

とんとん からり

とんからりん

はたおりのおとは、

三日みっか三みばんやむことはありませんでした。



四日<sup>よっか</sup>めのあさ、

ようやっとよめさまが

でてきました。

手<sup>て</sup>には、かがやくような

うつしいたんものを

もっています。

わかもの「これは、

なんときれいな

たんものだ」



しかし、よめさまの

かおは青<sup>あお</sup>白<sup>しろ</sup>く、

からだもやせて

小さ<sup>ちい</sup>くなっていました。

わかもの「つかれただろう。

さあ、かゆをたいて

おいたから、おたべ」

よめさま「そのたんものを、

おとのさまのとごころへ

もって行ってください」



わかもの「ああ、そうしよう。きっとたかくかって  
くださるだろう」

つぎの日とのさまは、そのたんものを一めみるなり、

とのさま「おお。このようなうつしいたんものは  
みたことがない」

と大よろこびし、すぐに干りょうでかっせんてくれました。

とのさま「ぜひ、もう一たんおってはもらえぬか」

わかもの「しょうちしました。すぐに、もう一たん

おもちいたしましょうう」





そうしていえにかえったわかものは、よめさまに  
たのみました。

わかもの「すまんが、なんとかもう一人、たんものを  
おつてはくれないか」

よめさま「それではおりました。でも、どうか、  
わたしがはたをおっているあいだは、けっして中なかを  
のぞかないでください」

とんとん からり とんからりん  
とんとん からり とんからりん

こんどは三日みっかたつても、  
はたおりはおわりません。

とんとん からり とんからりん



ふと、わかものはふしぎなことに気づきました。

わかもの「どうしてあんなみごとなたんものが、いともないのにおれるのだろう」  
でもわかものは、よめさまとのやくそくをやぶって、中なかをのぞくことはできません。  
わかもの「どうしてだ、どうして…」

とんとん からり とんからりん

とんとん からり とんからりん

七なの日めになると、わかものは、もういてもたってもいられなくなりました。

とうとうわかものは、なんどのしょうじを、そつとすこしあけると、

そのすきまから中なかをのぞきました。

わかもの「あ……」



はたをおっていたのは、  
よめさまではなく、一わの  
うつくしいつるでした。

つるは、そのながい口ばしでからだからはねを  
一本ずつひきぬいては、それをいとにしてたんものを  
おっていたのです。

わかもの「あああ……」

よあけちかくなって、はたおりのおとがとまりました。

**よめさま**「みてしまったのですね。わたしは、  
いつかあなたさまにたすけていただいたつるです。  
でも、ほんとうのすがたをみられたからには、  
もうおそばにいたることはできません」

よめさまは、あっというまに

うつくしいつるのすがたにかかりました。

(バタバタ)





わかものは、ゆきののはらにつるをおいかけます。

わかもの「たのむ、いかないでくれ！」

いかないでくれー！」

つる「うー」

つるはかなしそうに「こえなくと、あさやけのそらに  
きえていきました。



お  
わ  
り